

教職課程センター紀要 第6号 (第1頁) ページ、二〇二一年二月
 Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No. 5 (43)-(47), 2021
 研究ノート

卷子と掛軸をより安全に取扱う上での技法と留意点について

Techniques and points to keep in mind for safer handling of scrolls and hanging scrolls

丸山 猶計

Naokazu MARYAMA

キーワード 博物館資料、書画、卷子、掛軸、掛幅

はじめに

本年四月に本学文学部書道学科に着任するまで、二十一年間、筆者は東京・九州の両国立博物館に研究職員として勤務し、館の運営に係る作品の登録・管理を中心とした各種実務と、専門である書跡分野の学芸業務の双方に従事した。この間において、展示や貸与といった日常業務で、学芸員の作品取扱いの技量が、当然ながら作品のいわゆる健康寿命に大きく影響することを痛感し、書跡の一担当者として、作品の安全性をより高める取扱い技術の改良や小技の開発に関心をもち、作品の安全性を確実に担保する方法を求めつつ、文化財事故の芽を未然に摘むことを願ってきた。博物館の現場を離れたいま、さほど時間が経たないうちに、実際の作品取扱い場面での安全性のさらなる向上のため、とくに感覚的要素が大きい卷子と掛軸の取扱いに関して私見をまとめ、学芸員志望者を含め関係者の一助となることを願うものである。

一、卷子の取扱いについて

書画作品と不可分の関係にある卷子は、料紙を横長に数枚貼り継いで巻かれたもので、一般的な形式としては、巻頭に表紙、巻末に軸木が取付けられている。収納時は巻末から巻頭に巻きあげ、表紙に付けられた紐で卷子本体を巻いて仕舞う。卷子や掛軸のオーソドックスな取扱い方法やその際の留意事項等については、日本博物館協会編『改訂版博物館資料取扱いガイドブック』(ぎょうせい、二〇一六年、以下『ガイドブック』という)をはじめとする概説書にある通りで、本稿では特段の場合を除いて、屋上屋を架すことは避け、取扱いの基本事項については触れないこととする。この『ガイドブック』は、日本博物館協会が認定する美術品梱包輸送技能取得士資格の受験者や、博物館学芸員になることを目指す大学生等を読者に想定して作成されたもので、現時点でわが国の美術梱包に関するスタンダードな教科書といつてよく、大変すぐれた内容をもつ有益なテキストである。

さて、卷子と一口に言っても、作品ごとに来歴が異なり、物質面でもさまざまに個体差がある。本格修理を例にすれば、解体して物理的に弱いところは補強され、取扱いに際して特定部分に負荷が集中することのないように仕立てられる。しかし、修理完成後は、博物館での学芸業務、すなわち調査や展示等で取扱うことに、

徐々に物質的な固さが取れるいつぼうで、紙の厚みが異なるといった特定部分に物理的な負荷が掛りやすくなる。徐々に目に見えない微細な劣化が始まり、やがては折れなどの損傷として表面化する。諸行無常の世の中では、およそ形あるものは滅することを免れないが、取扱技術によって、特定の箇所に負荷を集中させずに、全体的にゆるやかに経年劣化させ、できるだけ安定した状態で次の修理まで伝えきることが望まれる。そのためにも、もつとも基本的で重要なのは、まずきちんと観察することである。至極当然で何ら目新しいことはないが、巻子や掛軸というのは、巻かれた状態で長期間保管される前提のものであるため、一時的に舒べ拡げられた紙には、必ず元に巻き戻ろうとする力が内在している。しかし、実際には、個々の作品でその力の程度が異なる。表具の仕立て方や劣化の度合いによっても、この元に巻き戻ろうとする力は一様ではない。ゆえに、もし、作品の元に巻き戻ろうとする力を確認せずに、それ以上の力をかけて取扱えば、作品の劣化を早め、破損などの事故をも招くだろう。このことは自明に属するためであろうか、『ガイドブック』等の概説書において、明確に書かれているものを管見では見たことがない。しかし、巻子・掛軸を問わず、書画作品の物質的・構造的特性とそこに内在する力を動的に観察できなければ、いやそれ以前に、肚を据えて観察眼を鍛えることへの覚悟をもたなければ、その学芸員は事故の可能性におびえたまま退職時まで作品を取扱うことになろう。また、取扱い上でいっけん手早く器用に見える者でも、作品への観察眼や謙虚さ、すなわち作品への敬意のようなものがなければ、結局のところ事故を未然に防ぐことはできないだろう。日本通運株式会社関東美術品支店で、長年現場を指揮した熟練作業員の故・岩淵建夫氏は、定年退職後に東京国立博物館の列品課列品室の非常勤職員として晩年をおくられた。博物館の研究職員と輸送業者の間にとって、事故防止とさらなる安全追求の観点から、現場に定めた梱包技術の指導・開発、文化財輸送に関する相談役、各種実務の段取りと連絡調整、後進の育成等、多岐に活躍され、現場の安全を支える縁の下の心強い存在だった。当時、若手だった筆者に対しても、取扱技術の基礎を丁寧に着得することの大切さを説かれた。巻子でも掛軸でも、あとから作業スピードをあげることではできず、最初から早さを求めると、基礎が身につかないことを懇切にお教えくださった。大切な恩人の一人である。

では早速、巻子を安全かつ安定的に巻くための手法について述べていきたい。はじめに、基礎的な鉄則として、巻子は上から触らず必ず横から触る、ということをお

げておきたい。上から触るといえるのは、平らな台や机に置かれた巻子に対して掌で撫で転がすような触り方を総称する。このとき、掌は巻子が置かれた台などの天面に対してほぼ水平に動き、肘を軸とした扇状の可動域で、巻子に接することとなる。このため、巻子にかかる力の方向は一定せず、巻子は素直に元に戻るはずの軌道を失う。よって、巻子は、所謂あばれた状態となり、小口（軸木にある程度巻かれた紙の厚みが面を成している部分）はもれなくタケノコ状を呈する。このタケノコ状のあばれを修正するために、料紙の上下端をゆるやかに指掌などで押さえざるを得ないが、微少であっても料紙のどこかは擦れて傷むことになる。したがって、巻子を上から触ることは小口がタケノコ状になることが不可避の触り方であるため、極力慎むべきであると言えよう。

つぎに、必ず巻子は横から触る、ということについて解説する。横から触るといえるのは、原理的に言えば、巻子の置かれた平らな台に対して取扱者の腕や指掌が垂直となるように巻子に触れることを指す。平らな面に置かれた巻子に真横から力が加われば、その軌道はおのずと安定する。体勢的に肘を伸ばした立位の状態であればこの方法で支障なく扱えても、現実的にはもつとも多い、椅子に腰かけて机上の巻子を扱う場合などは、腕の関節が痛み、安定した取扱いは難しい。ゆえに、基本的にどのような巻子でも安全性を確保できて、最小限の負荷で安定的に取扱う手法の開発が懸案だった。満足に巻けず苦しい歳月のなか、勤務先に限らず、出張先等でも巻子の取扱いが上手な人がいれば、お願いして扱うところを真横から見せていただいたりと、ご厚情を賜った。たとえば、いま思い出しても模範的で美しく、まさに熟練職人の手並みとも思える学芸員に、巻子の扱いをご教示いただいたことがあった。そのふつくらとして瑞々しい掌にも触らせていただき、国指定品をも触るから寝る前の美容的な手掌の手入れを日々怠らないという話に啓発された。また、ある学芸員は、私の前に座ると、手と眼から愛情を注ぎ込むかのように経巻を扱われたが、その方の日頃の作品への敬意を物語るような、荘厳な手の動きとまっすぐな眼差しが忘れがたい。また、別の館では、扱っている巻子がまるで可愛らしい生きものがその学芸員に懐くかごとくに見えた。なんとかこの境地に至りたいと、祈る気持ちで観察と考察を繰り返した。

就職して七年が経った頃、ふとあることに気づいた。彼らに共通しているのは、決して上から巻子に触らず、巻くほうの手が、たとえばフォークリフトが荷物パレットの隙間に繊細かつスムーズにフォークを差し込むように、巻子の接地面の隙

間にやわらかく指先を差入れ、次いで指の腹が卷子からなるべく離れないように巻き続ける残像が脳裏に浮かんだ。別の表現をすれば、机上の卷子と接地面との隙間に、指先（人によりけりだが、具体的には中指もしくは薬指、あるいはその両方など）をビタリと当てて、その指を中心に残りの指をフォーク状にして、なるべく広い面で指が卷子に接するように心がけて巻く残像であった。巻くときには、卷子に内在する元に巻き戻ろうとする力を想像しながら多少ゆるやかに巻くのがよく、キリキリと隙間なく生真面目に巻くよりも、およそ無難であると言える。もし巻いているときに、卷子がいくぶんタケノコ状になり、これを修正するためは、巻かれた紙と紙の間に多少の可動域、すなわちアソビが不可欠だからである。また、紙は温湿度に応じて伸縮するため、保管中の卷子自身の調整力を考慮すると、アソビを多少残した巻き方のほうが適当と言える。

さて、話を戻すと、卷子を安定して巻くモデルの原型はできたとして、実際の現場作業を想定すると、とくに展示ケース内の展示台は、来館者が見やすいように床に対して十五度ぐらいガラス側に傾斜している。こうした傾斜台に置かれた卷子を、台と壁の間に身体を入れつつ、安定的に巻くためには、さらなる技術的改良が必要であった。ふとしたときに、卷子の隙間に指を差入れてから、その指の爪を接地面に押し付け、こするようにして巻いてみると、これまで以上に安定的に巻くことができた。この方法を、他の卷子で試してみると、一様に安定的な操作性が確認できた。この、机等の面に爪をこすりつけるというコツを体得したことで、作品への力のかかり方のイメージがガラリと転換した。つまり、指の腹で卷子を押すという意識は捨て去られ、爪を支点とし、指の腹を作用点にして巻き上げるスタイルが、このとき完成した。支点となる爪が、取扱う際に適度に滑りがよいことも嬉しい発見であった。こうすると、卷子が元に巻き戻ろうとする力を、指先がより繊細に感得しやすくなり、爪を支点にすることで、卷子を巻く手掌の動きが格段に安定することが確認できた。

以上、卷子にかかる力を最小限にとどめつつ、安定的に巻くための一手法として、提案しておきたいと思う。

二、掛軸の取扱いについて

掛軸も卷子と同様に、常態として巻かれた状態で保管されるため、扱ければ元に

巻き戻ろうとする力が内在する。したがって、掛軸の取扱いにおいては、作品個々に異なる巻き戻ろうとする力の程度を見きわめ、逆らわずに巻き上げることが肝要である。

しかし、掛幅が卷子と異なるのは、垂直方向に掛けられることである。このため、例えば、床の間に一点で掛けられたときの掛緒のように、物理的な力が一箇所に集中し続けることのないよう取扱うことが大切である。『ガイドブック』でも紹介されているように、巻かれている掛軸を持つ場合は、八双を下にして本体を両手で受けるようにして持つなど（一〇三頁）、できるだけ面で取扱う意識をもつこと、さらに、掛幅の構造を念頭に、いまどこに物理的な力がかかっているか、作品の重心がいまどこにあるか等、取扱いの各段階で動的に変化する掛軸の諸状況を観察し、適切に扱うことが大切である。具体的な留意点として、『ガイドブック』との重複を避けつつ、一つだけ述べると、掛軸を展示ケース内で掛けるときは、必ず両手で取扱うことを徹底すること、すなわち、軸木中央部を片手で支え持ち、軸の重さで下ろし掛ける方式は厳禁であるということである。この扱い方は、表具の中央部に縦方向の力がかかり続けるため、必然的に中央部に縦方向の筋状の皺や小さな折れが発生し、やがて損傷として顕在化するためである。これは、掛軸の命とも言える本紙のそれも中央部分を積極的に損なう扱い方であり、厳に慎むべきと言える。ちなみに、掛軸の取扱いにかんして、『ガイドブック』では、その持ち方がもっとも重要であると説く（一〇二頁）。これは掛軸の構造上、「上からつかむ行為は、つよく掛物を握ることになり、巻かれている内側の本紙の部分を傷めることになりかねない。（中略）下から安全に持つ方法を心掛けるべきで、（中略）握ることなどで、内側に負担がかかり、厚く塗られた絵具等は、このときにもっとも傷められている可能性が高いのである。それを示すように、掛物で最初に傷むのは、巻いた軸の中央部分である。」（一〇三頁）と注意を喚起する。至極もつともな指摘であり、それほど傷みやすい掛軸の中央部分であるからこそ、掛けるときに片手で軸を下ろす行為は慎むべきであると言えるだろう。

さて、つぎに傷みやすい箇所としては、風帯があげられよう。箱から掛軸を出して紐をほどくと、畳まれた風帯があらわれる。狭い展示ケース内で紐をほどいて掛けようとする場合、この風帯を伸ばしきらずに掛け始める事例がまま見受けられる。その場合、たいがい片方の（多くの場合、本紙に向かって左側の）風帯の畳み癖がそのままになってきちんと展開せず、掛軸を掛け終わったあとに矢筈の先な

どでその風帯を直したりする例がある。ケースバイケースなのかもしれないが、もしその風帯が、たとえば中国の宋・元時代の墨蹟などに多く用いられる、染織史的にも貴重な古裂であったらどうするのだろうか。さらに、その裂が印金など、たいへん脆弱で剥落等の危険性が高いものの場合、事故の確率は一気に高まるだろう。このため、折り畳まれていた風帯は、ケース内外で平らな場所を確保し、状態点検を兼ねて丁寧に伸ばし、それから掛けることを習慣化すれば、事故を未然に防ぐ観点からも、適切と言えるだろう。掛軸の表具裂のなかでも、風帯と一文字には最も高価で格の高い裂を使用するのが一般的で、かつ風帯は取扱い時の物理的負荷を構造上免れない。よって、墨蹟に限らずどの掛軸でも、掛ける前には風帯の畳み癖を直し、状態を確認することが大切であろう。

さて、ここまでは常識的な掛軸の取扱い留意事項である。これから先は、筆者が博物館勤務のなかで考案し行ってきた、より安全に風帯を収納する小技について紹介しておきたい。



まず、その動機を述べると、掲出図版にみられるような、当初にはない折癖のついた風帯に、とある場所で出会ったことである。つまり、八双のキワで四十五度に折り畳まれた風帯の角が、収納時の軸側本体に巻き込まれて、新たな折癖がついているのである。ある程度、掛軸の取扱いの経験のある人なら、こうした癖のついた風帯を散見していよう。おそらくこの原因は、軸を仕舞う作業の終盤において、壁面のフックから掛軸を外した後、折り畳まれた上になっている風帯の角(多くの場合、本紙に向かって右側の風帯)が少し浮き上がっていることに気づかず、いきおい巻き込んでしまったためと考えられる。次回掛けるときまでこの折癖は発見されず、保管期間が長いとそのぶん深く刻まれてしまう。この不規則な折癖が当初の正しい折癖をしのいで常態化すると、掛軸を掛けたとき、その風帯が真っすぐ下がらず、癖のままによじれたり、斜めに傾いたりして、鑑賞上のストレスとなる。そこで、何とかこうした不意な折癖の発生を回避し、表具が仕立てられた当初の正しい折癖を取り戻す方法はないものかと模索し、就職から七年ほど経った頃、以下の方法を思いついた。

その方法とは、まず、掛幅が掛かった状態で、少なくとも本紙までは完全に巻きあげたのち壁面から下ろし、平らな面に置く。つぎに、風帯を当初の折り目どおりに忠実かつ慎重に折り畳む(そうするとかならず風帯が八双に平行になるはずである)。ここまでは、オーソドックスな取扱方法で、これ以後は風帯の保護に特化した小技である。まだ巻かれていない掛軸の上の部分の巻くにあたっては、取扱者の身体が八双側ではなく軸木側にくるようにする。つぎに、両軸端を両手でとり、軸木のある本体をだいたい三十センチ弱ほど上方にゆっくり持ち上げる。軸端が八双の真上ぐらいにきたら、ゆっくりと垂直に巻き下ろし、最後は軸木側の本体で風帯を上から押さえ込むようにして巻き納めるという手法である。このように、軸を少し持ち上げて真上から風帯を押さえ込むようにして巻けば、風帯に新しい折癖がつくことが回避でき、また、既についている折癖があれば、その癖をほとんど巻かれた軸本体で上からやや押し伸ばすようにして巻くことで、表具が仕立てられた当初の正しい折癖を風帯が取り戻せるものと考えられる。

以上、こちらも卷子と同様、既存の文化財の取扱いテキストには書かれていないが、より安全に風帯を仕舞うための小技として提案させていただきたく思う。

おわりに

これまでの学芸員生活で培ってきた卷子と掛軸の取扱いのノウハウのうち、世間に未紹介と思われる手法を紹介させていただいた。もとより、これら技術の前提には、安全性への不断の追求があり、そのために観察眼や洞察力の涵養が必須であることは言うまでもない。たとえば、作品の貸借時に、点検の質を高め、作品に即した安全な取扱方法を、貸し手と借り手が共有する上で、観察眼は不可欠である。また、展示の場面で、事故と隣り合わせのような脆弱な作品をいかに安全確実に触り得るかは、触る前の洞察力に左右される。卷子も掛軸も、重心の位置の変化などを意識しながら取扱い、たえず作品の動的なうごきを前提に危険を予測し続けることが重要となる。つまるところ、学芸員の宝とは、よい眼とよい手であると言える。

さいごに、文化財への観察眼を鍛える上で役立つと思われることを一つあげておきたい。それは、定期的に行ってきた収蔵庫内の床と作品を収納する箱の清掃である。この清掃に特別な仕様はなく、床のモップがけは保存修復担当が確認済の市販の不織布のシートを用い、また、保存箱には、同じく確認済の文化財用のウエットテッシュを用いて、二重箱であるが三重箱であろうが、また館蔵品・寄託品を問わず一律に、もちろん状態を確認しながら、箱のすべての面を清拭した。掃除を終えると、その前後での物理的变化が冷静に感知でき、そのことが清掃者への報酬のように思われた。日常的にこの床や箱の変化に気づきだすと、物質面での些細な違いを見逃さないようになり、作品を点検する際の眼の力を養う一助になった。しかし昨今、急激に視力や握力が低下し、博物館現場での作品の取扱いに懸念を感じ始めていたが、幸い本学に着任できたので、これを機に卑見を開陳した。今後、現役の学芸員諸氏や学芸員志望の学生、卷子や掛軸を取扱う人々にご検討いただき、さらによりよい技術を創出いただければ幸甚である。

付記：本稿で触れた卷子と掛軸の扱いについては、部分的に東京国立博物館の館内研修等で解説し、また、二〇二〇年二月に北米欧州美術館会議が同館で開催された際のワークショップ参加者にレクチャーしたが、いずれも限定的であり、公表するのは本誌が初となる。末筆ながら、学芸員として筆者を育ててくださった多くの人と作品に感謝したい。